

小さな町を守ること

奈良市立富雄第三中学校 三年 落合 一葵

私のおばあちゃんの家は神社だ。淡路島の小さな港町にある神社だが、歴史をさかのぼれば、平安時代以前から同じ場所で、私の先祖が神さまを、そして社を守ってきた。

そして神社のある町も同じく、古くから特色ある文化や土地を人々が守ってきた場所である。例えば方言。「由良弁」という地域特有の方言がある。「あなた」のことを「やー」と言ったり、だらしないことを「へんだらだしい」と言ったり、一見意味の分からない言葉が多く、町のご老人と会話するときは聞き取りにとっても苦勞する。しかしこのような方言も、今は町から消えつつある。なぜなら、若い人による「方言離れ」が進んでいるからだ。たしかに、町に住む若者から方言を聞くことは滅多にない。ほとんどの子供や学生は、わたしたちと同じような関西弁を話して暮らしている。

また、町の文化に関する問題はこれに限ることなくたくさんある。現在、一番大きな問題となっているのは「過疎化」だ。小さな田舎町であるこの地域の周辺には、大学はもちろん、就職先もあまりない。そのため若者が大人になって町の外へ出ていくことが多くなり、急激に人口が減少している。地元の中学校の全生徒数は、十数人にも満たないようだ。そしてもちろん、神社もこれらの影響を受けている。過疎化に伴い、参拝に来てくださる人や、祭りの担い手が少なくなっているからだ。母によると、今より30年前、お祭りに参加する人の数は現在の十倍ほどだったそうだ。実際に今年の夏祭りでは、例年よりだんじりを減らすことになった。

このように、人口の減少は、町の文化や特色が忘れられていくことに繋がる。私はそれではだめだ、そうならないといけない、と考えている。海が見えて、潮風が涼しい。朝も夜も鳥や虫の鳴き声がある。ふと外に出れば、そこを歩く人は声をかけてくれる。そんなこの町が、私は大好きだからだ。

これから町を守っていくために、私も当事者として、実際に行動していかなければならない。では、私が町を守るためにできることはなんだろうか。それは、「神社を活性化すること」だと考える。神社が町の「たすき」のような役割をしていることがその理由だ。一緒におみこしを担いだりして、祭りを盛り上げるために協力する。そしてその後、一緒に屋台へ出向いたり、盆踊りをして楽しむことによって、町内の結束が高まり、結果としてお祭りや神社が町の人たちの大きなコミュニティ、すなわち交流の場になるのだ。だから、神社を活性化することで、このような交流の場を復活させれば、町の文化や特色を守ることができるのではないか、と思う。

また、どのように活性化を進めるか、その具体策として考えたことが2つある。

1つ目は、外部から人を呼び込むことだ。都市化の進む世の中で、田舎暮らしをすることのよさや、町の美しい景色、神社のイベントなどを SNS で積極的に発信することで、実際の土地に興味を持ってもらう。それがいずれは観光客や移住者の増加にもつながるように、新しいイベントも計画して実施していくべきだと考えている。

2つ目は、地元の小学生や中学生に、地域の歴史や文化を学んでもらうことだ。自分の地域を好きになってもらえば、「ここに永住したい」「ここでお店を立てたい」と考えてくれる人も増えると考えた。

これらの策を実現することで、いつか、この優しく美しい町が、多くの人から愛される存在になったらいいなと思う。

しかし、過疎化の阻止が思い通りに成功するか、と言われれば、「もちろん成功するだろうとはとても言えない。なぜなら、過疎化で苦しむ地域は、日本国内に数えきれないほどあるからだ。わたしのおばあちゃんが住む町だけでなく、いくつもの小さな町が、田舎が、この国から消えようとしている。

私は、そのような町が無くなるととても悲しい。それは、古くから受け継がれてきた日本の文化を無くすことと同等であると考えているからだ。だから、大人も子供も、自分の「田舎」を大切にしてほしいと心から思う。